

障害児ケアに関する質的分析

東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学

中村安秀

要約：現在、障害児に関する保健医療ケアに関して、障害児医療、リハビリテーション施設、在宅医療システム、障害児保育、障害児教育などといったハード面での整備はかなり充足したといえよう。しかし、障害児をもつ家族、とくに母親や父親における子育て不安や育児環境の現状については、ほとんど報告や調査がなされていない。本研究では、障害児をもつ家族、とくに母親や父親において、どのような子育て不安があり、今後の育児環境の整備のためにはどのような施策が望まれているのかという点において、フォーカス・グループ・ディスカッション（FGD：Focus Group Discussion）などの質的分析を中心とした意識調査を行う予定である。本年度は、質的分析方法の概観とともに、FGDについて文献的研究を行い、障害児ケアに対する応用可能性について検討した。

見出し語：障害児、質的分析、意識調査、フォーカス・グループ・ディスカッション

1 背景

住民のニーズは生活水準や住民意識に伴い変化しており、現行の種々の母子保健施策が変化しつづける家庭や環境に対応できているのか、科学的な疫学的評価に基づいた検討が早急に必要である。しかし、従来、行政が行なっている事業の評価は医師や保健婦などの事業に関わる者が行なう評価が多く、第三者が行なう客観的評価に乏しかった。また、現代の母子を取り巻く多様なニードに対応するためには、単なる量的評価だけではなく、質的評価も重要視されなければならない。

2 質的分析法の発展の経緯

質的分析法とは、主にインテンシブなインタビューや参与観察などの定型化されない方法でデータを収集し、その結果の報告に際しても数値による統計的な分析よりは、言語による記述と分析を中心にする方法といわれている。

質的分析法を集大成したLazarsfeldは、消費者調査の経験をもとに質的調査技法の理由分析の三原則をまとめた。

(1) 被調査者のあいまいさと調査者の的確さのギャップを埋めるため質問が何を意味しているかを確認する方法としての明細化specificationの原則

(2) 質問票のパターンを情報提供者である被調査者の構造パターンに合わせる方法である分割divi

sionの原則

(3) 面接者と被調査者の間で成立している暗黙の思い込みtacit assumptionの原則を忘れないことである（Lazarsfeld PF. Qualitative analysis ; 1972）。

戦後、わが国の社会学における意識調査は、行動主義や操作主義を背景にし、主に質問紙法によった社会心理学的な意識研究が主流であった。1970年代からはコンピュータによるデータ解析の開発と普及により、複雑な相関の記述や検定が可能になった。各種の世論調査はこのような大規模な質問紙法の典型例であり、母子保健分野で多用されているアンケート調査や意識調査もこの流れを汲むものである。1970年代後半から質的データと数量的データをめぐる問題提起と論争が生じ、数量的データの収集や採集そのものが枠にはめられていること、被調査者のみならず調査者もデータに拘束されていること、調査者の視線が時代や社会の中に縛られていることなどへの内省がおこなわれた。

3 フィールドワーク

参与観察法participant observationが人類学的フィールドワークの中心的技法として確立されたのは、マリノフスキーの「西太平洋の遠洋航海者」（1922年）の出版以後である。社会学においても、1920 - 30年代にかけて都市民族学の黄金時

代といわれるシカゴ学派が活躍し、参与観察法を用いて都市の労働者や踊り子の生態を明らかにした。

フィールドワークは、参与観察法やインタビューなどを通じて、当事者と部外者という二つの視点を合わせもつことにより、調査対象の実態により迫ろうという試みだと解釈できる（佐藤郁哉・フィールドワーク：1992）。従来のアンケート法との差異をみると、現実の複雑さに対する配慮や調査デザインの柔軟性などの点で優れており、複雑な現在社会における母子保健の実態の調査には適していると考えられた。

4 FGD (Focus Group Discussion)

FGD（グループ・インタビュー法ともいう）は、マーケティングリサーチや国際保健では最も多用されている質的分析の一つである。マーケティングリサーチでは消費者のニーズの動向をいち早く的確に把握して企業活動に反映させていくための技法として活用され、国際保健では文化社会背景の異なるフィールドで住民のニーズや意識を把握するための手段として採用されている。

FGDの一般的なデザインは、数人の対象者を選定し、インタビューのテーマは決めておくが、あらかじめ設定された回答を用意せず、個人の自由な発言と発想に基づきインタビューが実施される。インタビュー結果の解析においては、代表的な意見や問題点を抽出するだけでなく、調査前には予想もしていなかった新しいコンセプトが見出だされることもある。また、事例数が少なくても実施可能であるため、少数者（マイノリティー）の意見やニーズを科学的に評価し、プロジェクト活動に反映させることができる（表1）。

このFGDが母子保健事業に応用された例としては、細川と山本らの報告がある。3歳児健診を受けた子どもをもつ専業主婦とワーキングマザーに対してFGDを実施し、各々のグループの健診に対するニーズや保健婦への期待などの違いを明らかにする調査結果を報告した。

あらかじめ回答が用意できない潜在的な意識を調査するには非常に優れた技法であると考えられ、地域における障害児とその家族の意識やニーズを調査するには非常に適切な調査方法であると考えられた。

5 FGDの実際

FGDの実際のプロセスに決まりはないが、お

おまかに以下のような手順で行われる（高山忠雄、安梅勅江：グループインタビュー法の理論と実際、1998）。

- 1) メンバーの選定方法を決める
(男女別・年齢別・疾病別など)
- 2) インタビュアーの選定
- 3) インタビュー内容の決定 (guideの作成)
- 4) FGDメンバーの決定 (6-12人)
- 5) FGDの実施 (テープに記録)
- 6) データ分析

FGDの利点は次のように考えられる。

- 1) 調査にかかわる費用が比較的安い
- 2) 対象集団が何を考えているのか把握できる
- 3) グループ・ダイナミズムにより個々のインタビューよりも深い理解が可能である
- 4) 少人数の集団でも分析が可能である

FGDは再現性がないことを批判されてきたが、現在では「結果が実践の場において有効かどうか」といった視点から内容分析を行い「確証evidenceと確実性credibility」により評価される。しかし、以下にあげるような限界を知った上で利用すべき調査法であると考えられた。

- 1) サンプル・バイアスが生じやすい
- 2) 雰囲気にもまれやすい
- 3) インタビュアーの技量に負うところが大きい
- 4) 分析方法により結果が異なることもある

比較項目	アンケート調査	
	FGD	調査
・現実の複雑性に対する対応		×
・調査事例の数	少数	多数
・バイアスの排除	×	
・調査デザインの柔軟性		×
・妥当性と信頼性		
・再現性	×	
・事業への応用性		
	: 優れている	: 問題がある
	×	: かなり問題がある

表1 FGDとアンケート調査の比較